

機関番号：12601
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20320133
 研究課題名（和文） 文化財保護制度における世界遺産条約の戦略的受容と運用に関する日韓比較
 研究課題名（英文） Comparative study of the strategic acceptance and management of the World Heritage Convention in cultural property protection systems of Japan and Korea
 研究代表者
 岩本 通弥（IWAMOTO MICHIIYA）
 東京大学・大学院総合文化研究科・教授
 研究者番号：60192506

研究成果の概要（和文）：本研究は、外形的に比較的近似する法律条項を持つとされてきた日韓の「文化財保護法」が、UNESCOの世界遺産条約の新たな対応や「無形文化遺産保護条約」（2003年）の採択によって、どのような戦略的な受容や運用を行っているのか、それに応じて「遺産」を担う地域社会にはどのような影響があり、現実との齟齬はどのように調整されているのかに関し、主として民俗学の観点から、日韓の文化遺産保護システムの包括的な比較研究を試みた。

研究成果の概要（英文）：The laws on the protection of cultural property in Japan and Korea have been considered to consist of legal clauses that are relatively similar, at least in their outward form. This research conducted a comprehensive comparative investigation of the systems for the protection of cultural properties in Japan and Korea from the viewpoint of folkloristics. Research focus was on the strategies of acceptance and management that these laws have shown in dealing anew with the UNESCO World Heritage Convention and the adoption of the Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage (in 2003), as well the influence this has had on local societies that shoulder this 'heritage', and the ways by which discrepancies with the actual situation are being regulated and adjusted.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2009年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2010年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
年度			
総計	13,500,000	4,050,000	17,550,000

研究分野：民俗学、東アジア文化交流史、日常史

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：ふるさと資源化、民俗文化財、文化資源、観光化、フォークロリズム、文化財保護法、世界遺産条約、無形遺産条約、文化的景観

1. 研究開始当初の背景

ユネスコ（国連教育科学文化機関）の世界遺産条約が各国の国内法や「遺産」を担う地域社会に与える影響に関しては、民俗学をは

じめ、文化人類学・人文地理学・社会学などにおいて、既に複数の研究が公表され始めてはいた。しかしその多くは、ユネスコの方針に対する対処療法的な研究か、制度枠組のレ

ビュー的研究に留まっており、フィールドワークに基づく重層的で多声的な「現場」を映し出した研究は少なかった。研究代表者および研究分担者は、ほぼ同じ研究メンバーによって、2001～2003年度に科研基盤研究(B)「文化政策・伝統文化産業とフォークロリズム—『民俗文化』活用と地域おこしの諸問題」(課題番号13410095)、2005～2007年度には同基盤研究(B)「地域資源としての〈景観〉の保全および活用に関する民俗学的研究」(課題番号17320138)を組織し、メンバーのそれぞれのフィールドワークの現場で生起している諸現象を、エスノグラフィックな総合的な記述を施し、かつそれらを比較研究することを積み重ねてきた。世界遺産条約の新たな対応として、1992年に新規カテゴリーとして追加された「文化的景観」や、2003年に採択された「無形文化遺産に保護に関する条約」(以下、無形遺産条約)により、ローカルなはずの民俗文化が、文化資源化(専ら観光資源化)されていく動きは韓国でも同様であり、フィールドワークに基づき同様の視角からの研究を蓄積してきた、韓国の科研プロジェクト「無形文化財の創出と流用—韓国民俗学再考」(研究代表者・南根祐)とも協力し、上記課題の遂行を目指すこととなった。

2. 研究の目的

本研究は、ナショナル化／グローバル化に伴う民俗文化のあり方を、その実態において記述するのみならず、それを取り巻く社会・制度そして学問との相互関係も含めて分析し、より多面的かつ動的に明らかにする全体的研究の一環に位置づける。特に本研究では、世界遺産条約や無形文化遺産条約という文化財保護制度のグローバル化要素に注目し、これらとローカルな法制度との相互関係や、ローカルな法制度にもたらされる変化、そしてこれら全体の影響が及ぶことによって起こる民俗文化そのものの変化を、具体的に明らかにすることを本研究の目的とした。

3. 研究の方法

各人が遂行してきた、フィールドワークの現場を継続調査をするとともに、それらの地を科研メンバーが相互に訪れ、知識や情報の共有化を図る一方、共同研究会を開催し、理論的背景や問題意識を公有化した上で、下記の論点を方法(視点)として意識化した。

(1)世界遺産条約及び無形遺産条約というグローバル・スタンダードに対する日韓両国の戦略的受容と国内法の対応に関して、「文化的景観」「無形文化遺産」の2カテゴリーの制度化プロセスを事例として明らかにする。その際、ユネスコ・日本・韓国間における「文化財」概念との間のずれについても明確化する。また、無形文化遺産条約上の「無

形文化遺産」概念の設定プロセスにおいて、東アジア諸国からの働きかけが果たした影響についても明らかにする。

(2)日韓の文化財保護制度の体系的相違を分析することで、その根底に横たわる日韓の「文化(財)」概念の異同を明らかにする。

(3)日韓両国で行う共同現地調査に基づき、具体的に文化的景観や無形文化遺産として選び出された文化財と、それを支える地域社会にもたらされた影響や摩擦および制度面へのフィードバックを調査・分析することで、民俗文化をめぐるダイナミズムを明らかにする。

4. 研究成果

上記のような方法(分析視角)から導き出された研究成果は、大きく言って次の3点にまとめられる。

(1)まず第1の成果として掲げられるのは、グローバル基準を受容する、前提となっている日韓の「文化財保護法」の体系的な比較対照を行ったことである。もとななる日韓の「文化財保護法」に焦点を当て、両国の保護法と関連する施行令や施行規則までを含め、徹底的に比較対照したのに加えて、運用の実際面も視野に入れて検討した。日本植民地期の朝鮮古蹟調査に淵源し、発足時には条文が類似していたとしても、双方とも数次の全面改訂を経て、施行後50年を過ぎた現在、実際面でのその運用は、例えば韓国の「伝授教育制度」をはじめ、相貌を大きく異にする一方、世界遺産2条約の受容によって、逆に近接化する側面も見られることなどが明らかとなった。

少し具体例を挙げながら、その体系的な相違を紹介すれば、世界遺産条約におけるCultural Landscape概念の導入が最大の転機となった両国の文化財保護法上の「景観」概念の、受容と運用に関して、次のような差異が認められた。両国ともにそれまで同法上にはなかった「文化的景観」を、どのように制度の中に定着させていくか、それが焦点となるが、何を対象化するかでは両者の近接が多いものの、日本では法律条文で「文化的景観」という新たなカテゴリー(種別)を設けて対応したのに対し、韓国では既存の「記念物」とカテゴリーの中で、運用して対処している顕著な相違が明確となった。同様の運用レベルでの対応の相違は、「民俗技術」というカテゴリーにおいても見られるが、外形的な文言の比較ではなく、法体系自体の違いを明晰化できたことが本研究の第1の成果であるといつてよい。

(2)具体的なカテゴリー内部の比較検討に論点を移せば、「無形文化遺産」には、民俗芸能／民俗芸術と工芸技術(民俗技術)、および古武道などが含まれる。民俗芸能・民俗

儀礼に関しては、奥能登のアエノコトと江陵の端午祭という日韓の二つの現場のフィールドワークを、中心的な事例として、無形遺産条約の受容による国内法の変化や地域社会の変容を対比した。無形文化遺産の代表リストに搭載されるのは、いわゆる民俗芸能と民俗儀礼が圧倒的に多いが、日本で呼ばれる「民俗芸能」が「民俗芸術（郷土芸術）」と称される韓国との質的な相違点や、日本では区別される無形文化財／無形民俗文化財が一元化されている韓国との違い、またいわゆる人間国宝と呼ばれる「個人」か保存団体で指定するかによる差異などが析出された。さらに日本では文化財とは看做されることのない、古武道なども指定する韓国文化財の特色も抽出された。

(3)「文化的景観」に関しては、文化的景観の受容に加え、住民（マタギ）の生活を拘束した点では、文化的景観と通有する世界自然遺産・白神山地の観光化の実態も補足しながら、両国の自然観も含めて比較対照した。日本の文化財保護法の「文化的景観」と世界遺産条約の定義する‘Cultural landscape’との相違と、その概念の相違が与えた影響を検討した上、韓国の文化的景観ともいえる「民俗マウル」のうち代表的な安東河回村を事例に、ナショナル・ブランド化されていくその創出過程や、さらには世界遺産化する際の主体の複数性を描出した。さらに、これらのもととなる「文化」観を含む「自然」観の違いや、自然保護と文化財保護との本質的な相違なども考究した。

これらの研究成果の一部は、平成 24 年度科研費「研究成果公開促進費」の助成を得て、岩本通弥編『世界遺産時代の民俗学—グローバル・スタンダードの受容をめぐる日韓比較』（風響社、2012 年度刊行予定）として、広く一般に公開される。複数の韓国人研究者を共同研究者に迎えるという研究組織の学際性・国際性はもとより、その問題関心と研究対象は、グローバル化の進展に伴い、生活文化の全地球的な均質化・画一化が問題となっている今日、民俗学者に限らず、多くの人文社会科学系研究者にとって緊喫な課題であり、その出版は国内だけでなく、国外（特に東アジア）でも相応のインパクトをもたらそう。「文化的景観」にせよ、「無形文化遺産」にせよ、これらは現在進行形で進んでいる課題であって、制度化のプロセスに若干の先行研究があるだけで、具体的な影響などについてはほとんどまだ研究が行われていないという研究の新規性からしても、ある程度の注目やインパクトを及ぼそう。

ただし、出版で一般公開可能なのは、あくまで研究成果の一部にすぎない。例えば最終年度の 2010 年 10 月に、柳田國男『遠野物語』の刊行百周年で、これも用いて観光資源化を

試みている岩手県遠野市の現場を、韓国人研究者も交え共同調査を行ったが、韓国では日本という「語り部」、いわゆる民話を物語るパフォーマーによって地域資源化を行っている例は、現在のところ全く存在しておらず、「口承」のありように関して、このような両国間の差異も浮上化した。ほかにもいくつか日韓の相違点が印象論レベルで見えてきたものもあるが、活字化できるまで論理的な精緻化はなされておらず、今後に残された課題として付記しておく。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 78 件）

①岩本通弥、家族をめぐる二つの生活改善運動—民力涵養運動と新生活運動、田中宣一編、暮らしの革命—戦後農村の生活改善事業と新生活運動、農文協、査読無、2011、91-118 頁

②岩本通弥、談話会記録：オーラルヒストリーと〈語り〉のアーカイブ化に向けて—文化人類学・社会学・歴史学との対話、日本民俗学、265 号、査読無、2011、159-165 頁

③川森博司、民俗学と観光、江口信清・藤巻正己編、観光研究レファレンスデータベース 日本編、ナカニシヤ出版、査読無、2011、2-10 頁

④高木博志、桜、板垣竜太ほか編『東アジアの記憶の場』河出書房、査読無、2011、263-287 頁

⑤俵木悟、民俗芸能の伝承組織についての一試論—「保存会」という組織のあり方について、東京文化財研究所無形文化遺産部編、無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究報告書、査読無、2011、59-79 頁

⑥濱田琢司、田舎暮らしへの志向とモダニズムの心性、パナソニック電工汐留ミュージアム編、濱田庄司スタイル、美術出版社、査読無、2011、34-41 頁

⑦室井康成、柳田国男と「事大主義」—同時代の言説空間における意味の特質、国立歴史民俗博物館研究報告、165 集、査読有、2011、81-96 頁

⑧岩本通弥、現代日常生活の誕生—昭和三十七年度厚生白書を中心に、国立歴史民俗博物館編、高度経済成長と生活革命—民俗学と経済史学との対話から、吉川弘文館、査読無、2010、20-40 頁

⑨岩本通弥、作為方法的記憶—民俗学研究中“記憶”概念的有効性、文化遺産、中山大学中国非物質文化遺産研究中心（中国・広州）、2010 年 4 期、査読有、2010、109-115 頁

⑩岩本通弥、圍繞民間信仰的文化遺産化的悖論—以日本的事例為中心、文化遺産、中山大

学中国非物質文化遺産研究中心(中国・広州)、2010年2期、査読有、2010、105-114頁

⑪ 浅野敏久・金料哲・伊藤達也・平井幸弘・香川雄一、韓国の干潟開発論争地の「その後」にみる「持続可能な開発」、地理科学、66号、査読有、2010、217-230頁

⑫ 浅野敏久、開発反対運動とシンボル動物、地球科学、65(3)、査読有、2010、217-230頁

⑬ 菊地暁、棚田のこと、アエノコトのこと—石川県輪島市「白米の千枚田」から、奈良文化財研究所編、文化的景観研究集会(第2回)報告書 生きたものとしての文化的景観—変化のシステムをいかに読むか、査読無、2010、106-118頁

⑭ 青木隆浩、文化財保存の広域化における現状と課題—滋賀県の文化的景観をおもな事例として、国立歴史民俗博物館研究報告、156集、査読有、2010、245-263頁

⑮ 才津祐美子、近代日本における人文景観を中心とした「空間」の保存と活用の歴史的展開、国立歴史民俗博物館研究報告、156集、査読有、2010、123-135頁

⑯ 濱田琢司、大日本窯業協会・工政会の倉橋藤治郎と胎動期の民芸運動—美術と産業の間への視線、アカデミア人文・社会科学編(南山大学)、91号、査読無、2010、249-302頁

⑰ 濱田琢司、無形文化財制度(工芸技術)における職人性と芸術性、南山大学日本文化学科論集、10号、査読無、2010、23-43頁

⑱ 俵木悟、無形民俗文化財の映像記録—「使える記録」の実現に向けて、日本民俗学、264号、査読有、2010、122-137頁

⑲ 室井康成、「ガバナンス」の現在と民俗学研究の方向、日本民俗学、262号、査読有、2010、193-204頁

⑳ 岩本通弥、「生活」から「民俗」へ—日本における民衆運動と民俗学、日本学(韓国・東国大学校・日本研究所)、29輯、査読無、2009、29-63頁

川森博司、旅の経験と民俗学の構想—宮本常

㉑ 一を中心に、神女大史学、26号、査読無、2009、23-33頁

㉒ 高木博志、近代日本の文化財と陵墓—政治や社会との関わりにおいて、考古学研究58(3)、査読有、2009、28-39頁

㉓ 浅野敏久・金哲・伊藤達也・平井幸弘、環境問題論争における空間スケールに応じた争点の相異と運動の連帯韓国・セマングム干拓問題を事例として、地理学評論、82号、査読有、2009、277-299頁

㉔ 浅野敏久、福山市の地域組織・住民活動の現状と課題、日本研究(広島大)22号、2009、査読無、1-22頁

㉕ 浅野敏久、市民・住民運動を通じてとらえる環境問題、竹中克之他編、人文地理学、ミネルヴァ書房、2009、査読無、251-270頁

㉖ 菊地暁、「文化的景観」のポリティクス—

石川県輪島市「白米の千枚田」の事例から、

韓国民俗学、49号、査読有、2009、7-56頁

㉗ 菊地暁、敵の敵は味方か?—京大史学科と柳田民俗学、小池淳一編、民俗学的想像力、せりか書房、2009、査読無、159-183頁

㉘ 俵木悟、民俗芸能の「現在」から何を学ぶか、現代民俗学研究、1号、2009、査読無、79-88頁

㉙ 俵木悟、無形文化遺産保護分野における大学院教育への期待、上杉富之・佐山淳史編、グローバル研究の実践的展開、成城大学グローバル研究センター、2009、14-21頁

㉚ 青木隆浩、盛り場の多機能化と青少年の排除、神田孝治編、レジャーの空間—諸相とアプローチ、ナカニシヤ出版、2009、査読無、183-191頁

㉛ 才津祐美子、世界遺産「白川郷」にみる文化遺産化と観光資源化、神田孝治編、観光の空間—視点とアプローチ、ナカニシヤ出版、2009、査読無、224-233頁

㉜ 室井康成、柳田国男と教育基本法—「公民」観の位相と戦後民俗学構想をめぐって、教育学研究室紀要(国学院大学教職課程研究室)、27号、2009、査読無、141-162頁

㉝ 室井康成、「一国民俗学」は罪悪なのか—近年の柳田国男/民俗学批判に対する極私的

反駁、柳田国男研究会編、柳田国男・主題としての「日本」、梟社、2009、118-144頁

㉞ 川森博司、第二の人生を生きる民俗—中高年女性の人生の再構築、小松和彦還暦記念論集刊行会編、日本文化の人類学/異文化の民俗学、法蔵館、2008、査読無、621-635頁

㉟ 高木博志、近代日本と豊臣秀吉、鄭杜熙ほか編、壬辰戦争—16世紀日・朝・中の国際戦争、明石書店、2008、査読無、189-208頁

㊱ 高木博志、『史蹟名勝天然記念物』昭和編・解題、史蹟名勝天然記念物(昭和編)解題・総目次・索引、不二出版、2008、7-35頁

㊲ 青木隆浩、近代規範意識とフォークロア—若者文化との対峙、国文学解釈と鑑賞、73巻8号、2008、査読無、60-67頁

㊳ 青木隆浩、文化的景観の現状と諸問題—京都府の事例を中心として、岩本通弥編、地域資源としての(景観)の保全および活用に関する民俗学的研究、2008、査読無、55-67頁

㊴ 菊地暁、おまえはすでに(民俗学者)だ—(民俗学)の「可能性」なるものの語り方、国文学解釈と鑑賞、73巻8号、2008、査読無、18-28頁

㊵ 俵木悟、無形文化遺産の映像記録作成の意義と課題—無形の民俗文化財を中心に、地域政策研究、45号、2008、査読無、50-56頁

㊶ 才津祐美子、「景観」という視点の導入とその影響、白川村荻町地区における「展望台」の創設を中心に、岩本通弥編、地域資源としての(景観)の保全および活用に関する民俗学的研究、2008、査読無、47-54頁

学

的研究、2008、査読無、47-54頁

⑫才津祐美子、白川村発見「大家族制」論の系譜とその波紋、小松和彦還暦記念論集刊行会編、日本文化の人類学/異文化の民俗学、法蔵館、2008、査読無、428-449頁

〔学会発表〕(計 29 件)

- ①岩本通弥、都市民俗学の可能性—日本民俗学 30 年余の経験をふまえて、第 1 届都市社会論壇、城市化与城市生活国際学術会議、2011 年 10 月 21 日、中国上海・華東師範大学
- ②室井康成、Legends that Legitimize the South Korean Presidency、American Folklore Society annual meeting、2011 年 10 月 15 日、Indiana University, U.S.A
- ③才津祐美子、「景観保全」という課題—文化財保護制度を中心に、日本民俗学会第 63 回年会シンポジウム、2011 年 10 月 1 日、滋賀県立大学
- ④川森博司、日本昔話における女性像の特質—男女逆転型の照射、日本昔話学会 2010 年度研究大会シンポジウム、2010 年 7 月 7 日、新座・立教大学
- ⑤青木隆浩、歴史系博物館における地理学、日本地理学会大会、2010 年 3 月 28 日、法政大学
- ⑥岩本通弥、民間信仰の文化遺産化の問題点、第 7 回中国青年文化フォーラム、2009 年 8 月 7 日、中国・北京師範大学珠海分校
- ⑦俵木悟、日本の無形文化遺産保護における映像記録の役割、田野の経験中日韓非物質文化遺産保護方法論壇、2009 年 6 月 19 日、中国・天津大学
- ⑧俵木悟、韓国における無形文化遺産記録のアーカイブ化の現状と日本における無形文化遺産記録データベースの構築、韓国国立文化財研究所ワークショップ、2009 年 6 月 5 日、韓国国立文化財研究所
- ⑨俵木悟、Double-reed Musical Instruments in Japanese Popular Tradition、International Symposium on 'Double-reed Instruments in Eurasia、2009 年 12 月 13 日、カンボジア・パンニャシヤストラ大学
- ⑩岩本通弥、現代日常生活の誕生—昭和 37 年度厚生白書を中心に、第 69 回歴博フォーラム高度経済成長生活変化、2009 年 6 月 20 日、一橋記念講堂
- ⑪才津祐美子、日本における民俗の文化財化について—無形の民俗文化財を中心に、2008 年度韓国民俗学会国際学術大会、2008 年 12 月 13 日、韓国・国立民俗博物館
- ⑫菊地暁、「文化的景観」のポリティクス—石川県輪島市「白米の千枚田」の事例から—2008 年度韓国民俗学会国際学術大会、2008 年 12 月 13 日、韓国・国立民俗博物館
- ⑬岩本通弥、グローバル文化のローカル化、ローカル民俗のグローバル化、2008 年度韓国民俗学会国際学術大会シンポジウム、2008 年

12 月 12 日、韓国・国立民俗博物館

- ⑭岩本通弥、民俗文化と地域の活性化—その問題点と可能性、日本昔話学会 2008 年度大会講演、2008 年 10 月 12 日、大町文化会館
- ⑮岩本通弥、民俗学は「民俗」学ではない—現代民俗学の輪郭、現代民俗学会、2008 年 9 月 20 日、お茶の水女子大学

〔図書〕(計 13 件)

- ①岩本通弥・法橋量・及川祥平編、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、オーラルヒストリーと〈語り〉のアーカイブ化に向けて—文化人類学・社会学・歴史学との対話、2011、172 頁
- ②菊地暁・中谷礼仁・清水重敦・石川初、福島加津也・御船達雄、平凡社、今和次郎「日本の民家」再訪(瀝青会編の名で)、2011、393 頁
- ③高木博志、山川出版社、陵墓と文化財の近代、2010、110 頁
- ④神田より子・俵木悟編、吉川弘文館、民俗小辞典 神事と芸能、2010、508 頁
- ⑤藤田治彦・川島智生・石川祐一・濱田琢司・猪谷聡、淡交社、民芸運動と建築、2010、159 頁
- ⑥青木隆浩編、国立歴史民俗博物館、人文・自然景観の開発・保全と文化資源化に関する研究(国立歴史民俗博物館研究報告 156 集)、2010、313 頁
- ⑦室井康成、森話社、柳田国男の民俗学構想、2010、295 頁
- ⑧古家信平・俵木悟・菊池健策・松尾恒一、吉川弘文館、日本の民俗 9 祭の快樂、2009、304 頁
- ⑨岩本通弥・篠原聡子・金子淳・前田裕子・宮内貴久、国立歴史民俗博物館、基幹研究「高度経済成長と生活変化」ワークショップ 3「団地暮らしの誕生と生活革命」報告・討論記録集、2009、197 頁
- ⑩丸山宏・伊従勉・高木博志編、思文閣出版、近代京都研究、2008、628 頁
- ⑪岩本通弥編、東京大学大学院総合文化研究科、地域資源としての〈景観〉の保全および活用に関する民俗学的研究(平成 17~19 年度科学研究費補助金研究成果報告書)、2008、169 頁
- ⑫川森博司・山本志乃・島村恭則、吉川弘文館、日本の民俗 3 物と人の交流、2008、304 頁
- ⑬李相賢・岩本通弥・周永河・張隆志・南根祐、民俗苑(韓国ソウル)、東アジアの近代化と民俗学の創出(ハングル)、2008、365 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩本 通弥 (IWAMOTO MICHIIYA)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：60192506

(2)研究分担者

川森 博司 (KAWAMORI HIROSHI)
神戸女子大・文学部・教授
研究者番号：20224868

高木 博志 (TAKAGI HIROSHI)
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：30202146

浅野 敏久 (ASANO TOSHIHISA)
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：00284125

菊地 暁 (KIKUCHI AKIRA)
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：80314277

青木 隆浩 (AOKI TAKAHIRO)
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授
研究者番号：70353373

才津 祐美子 (SAITSU UMIKO)
長崎大学・環境科学部・准教授
研究者番号：40412613

俵木 悟 (HYOKI SATORU)
成城大学・文芸学部・准教授
研究者番号：30356274

濱田 琢司 (HAMADA TAKUJI)
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：70346287
(2009年度 研究協力者→研究分担者)

室井 康成 (MUROI YASUNARI)
東京大学・東洋文化研究所・特任研究員
研究者番号：50526770
(2009年度 研究協力者→研究分担者)

(3)研究協力者

中村 淳 (NAKAMURA JUN)
青山学院女子短期大学・非常勤講師
研究者番号：10292715

(4)海外研究協力者

南 根祐 (NAM KUN-WU)
韓国・東国大学校・教養教育院・教授

李 相賢 (LEE SANG-HYUN)
韓国・安東大学校・国学部・教授

李 承洙 (LEE SEUNG-SOO)
韓国・中央大学校・文科大学・教授

丁 秀珍 (JUNG SOO-JIN)
韓国・東国大学校・教養教育院・講義担当
教授

エルメル・フェルトキャンプ (ELMER
VELDKAMP)

オランダ・ライデン大学・日本語日本文化
学部講師 (Lecturer, Department of Japanese
Languages and Cultures, Leiden
University)

金 賢貞 (KIM HYEON-JEONG)
日本学術振興会・外国人特別研究員 (東京
大学・総合文化研究科)